

「あ！萌え」の構造：序論

(6)

応用人間科学研究科 齋藤清二

18. 「萌え」と「快感」と「プラセボ効果」

今回は、「カップ焼きそば現象」から、特に脈絡もなく「偽薬による真実の効果」（一般にはプラセボ効果と呼ばれる）へと話題がジャンプしたのであるが、この脈絡のなさが、本論考の一貫した特徴であるから、読者としてはあまり気にしないようにしてほしい。

ここまでああでもないこうでもないと考え続けてきたように、「萌え」という現象は、

非常に様々な観点から定義したり、論じたりすることができるものであるが、その特質として、「萌え」は人間に「pleasure」をもたらすものであるということにはほぼ異論はないと思われる。「pleasure」という言葉は、一般には「快感」「快樂」「喜び」「愉快」「楽しみ」「おもしろさ」などと訳される。「快樂」と翻訳すると、これは一般に「肉体的快樂」「世俗的快樂」を意味することとなり、良い子にとってはちょっと恥ずかしさと後めたさを感じさせる言葉となる。しかし、元来「pleasure」とはもっと一般

的で普通のことを意味する言葉である。

「Thank you!」と感謝の言葉を投げかけられた時、日本語の「どういたしまして」の意味で「Not at all!」などという無粋な表現ではなく、「It's my great pleasure!」と返すのは、ちっとも変な意味ではない。その君、わかってるね。そこで、本論では良い子でも恥ずかしがらずに使える表現として、pleasure を「快感」と訳すことにする。

そこでもう一度「萌え」の定義について理屈をこねると、『萌え』とは主体に『快感』をもたらし強力な作用をもつものであり、それは『性的交流』や『恋愛』と似てはいるが同じものではない」ということになる。「快感」は、通常「苦痛」とは正反対の感情・情動であるから、「萌え」に強い「苦痛抑制効果」があるということは当然であり、ここから、ストレスに対するコーピング（対処）の手段として「萌え」は極めて有効かつ（比較的）安全なものであるという結論が導かれることについてはすでに詳しく論じた。

さらに「萌え」もうひとつの特徴として、典型的な萌えの対象は「似姿（ポートレート）」や「絵」や「写真」や「動画」などの二次元画像（イメージ）であり、これは「実体を持つ＝現実（リアル）の存在」とは区別されるということが言える。もちろん、「萌え」の対象となるものは純粋な視覚的情報だけではないが、ここでは話を単純化するために、二次元画像とその関連現象に話を絞り、そのような対象への「萌え」がもたらす「快感」を例にとって話を進める。つまり、「萌え」が「快感」の惹起を通じてもたらす「苦痛抑制効果」は、物理的実体（例えば有効な成分を含む薬物）がもたら

す効果と同等かそれ以上のものであるにも関わらず、「萌え」そのものには物理的実体はない（あるいはそれを必要としない）。その意味で「萌え」が「偽薬効果（プラセボ）」と呼ばれるものと同じ働きを主体に対してもたらすということはおかしなことではないのである。まわりくどい言い方になってしまったが、ここから逆に一般的に「プラセボ効果」と呼ばれている現象をさらに考察することによって、「萌え」が主体に与える効果について理解を深めることができるということになる。

19. プラセボ効果は「人を喰う」か？

「プラセボ効果」は、医療・医学領域では広く認識されている現象だが、それをどう理解するかについては甚だしい混乱が認められる。一般には「プラセボ効果」という言葉は、「偽薬効果」というその名称が容易に示唆するように、「インチキ」「詐欺」「迷信」といった倫理的にネガティブな意味づけとともに用いられている。それは、前回紹介した「愛の妙薬」というオペラにおける偽の惚れ薬（実は安葡萄酒）の扱いにも明瞭に現れている。しかし、ここまでの「萌え」についての議論から明らかになるように、プラセボ（効果）とは「偽薬＝安葡萄酒や乳糖粉末」そのものではない。プラセボ効果は、物理的実体である偽薬に付随した作用のように一見思えるが、「偽薬」と「プラセボ効果」の間には直接の因果関係はない。これはよく考えてみれば当たり前のことであって、むしろ「偽薬」とその効果の間に因果関係がないということが「プラセ

「効果」と呼ばれる現象の本質であると言ええる。では、「プラセボ効果」とは本来は何か？と言えれば、それは「非特異的な効果」のことなのである。(ちなみに、「ひとくいてき」とPCに打ち込むと、通常は「人食い」と変換される。つまり、「非特異的な効果」とはまさに「人を喰ったような」効果なのである)。

一々細かい言葉にこだわっているように聞こえるかもしれないが、「非特異的な効果」というのは、実はすごいことなのである。え、意味が分からないって？これから説明するから、少しお待ちいただきたい。

20. 特異的でないということはずいこと

「非特異的」であるということのすごさを理解するためには、「特異的」ということがどういうことかを考えていくと分かるのである。「特異的な効果」というのは、例えば、頭痛に効く薬は「頭痛にしか効かない」という意味で「特異的な効果をもたらす薬」なのである。そんなのあたりまえだと思うだろう。風邪薬を例にとってみよう。風邪というのは極めてありふれた疾患であるが、医学的な定義は「ウイルス感染によって起こる上気道の炎症」である。風邪の症状の代表的なものは、鼻水、くしゃみ、喉の痛み(咽頭痛)、咳、痰、悪寒(いわゆる寒気)、発熱、倦怠感(いわゆるだるさ)といったものである。厳密に言うともっとたくさんあるのだが、ざっと挙げてみただけでこんなにある。これらの症状はおおざっぱに、「鼻の症状」「喉の症状」「気管支の症状」

「全身症状」等にカテゴライズされる。もちろんこれらが全て揃う必要はないが、多くの場合、このうちのいくつか揃って現れた場合、私達は「風邪をひいたらしい」と思うのである。それでは、「風邪に特異的に効く薬」はあるのか？ 答えは「ありません」である。

理屈上は、上記の症状が全てウイルス感染によって引き起こされているのであれば、「ウイルスを殺す薬」があれば、それは風邪の症状全てに効くはずであるが、そんな薬は現在のところない(インフルエンザなどの特定のウイルスに対する薬は一応あるのだが、それはそれで色々問題がある)。

「おかしいなあ、薬局へ行くと、『総合感冒薬』というのがたくさん売られているよ。あれは『感冒=風邪』に特異的に効く薬じゃないの？」とみなさんは思うだろう。しかしそうではない。総合感冒薬というのは、「鼻水に特異的に効く薬」「喉の痛みの特異的に効く薬」「咳に特異的に効く薬」「発熱に特異的に効く薬」を少しずつ混ぜ合わせたものなのである。ただし、どれもちょっぴりずつしか入っていないので、必ず効くとは限らないし、「鼻水は出るが咳は出ない」という症状の人が総合感冒薬を飲むと、一部は明らかに無駄な薬を飲んでいるということになる。

風邪を引いて病院を受診すると、街の薬局で売られているのは全く違う薬が処方される。病院では(きちんとした医者なら)、ひとつの症状に対してひとつの「特異的に効く(はず)」の薬を処方する。ひとつの薬は、原則としてひとつの症状にしか効かない。熱を下げる薬は鼻水には効かない。鼻水の薬は咳には効かない。その代わりその

薬は十分な強さをもっており、多くの場合そのひとつの症状をしっかりと抑えてくれる（もちろん、それにもかかわらず効かない場合もある）。だから、単なる風邪で病院へ行っても、酷いときは5種類以上も薬を出されることがある。そしてその中には風邪の原因であるウイルスに特異的に効果のある薬は入っていない。

「え、でも風邪の時って、抗生物質をよくもらってくるじゃない。あれって風邪の原因になっている細菌を殺す薬じゃないの。だから風邪に特異的に効果があるんじゃないの？」。残念でした。何度もいうが、普通の風邪はウイルスによる感染症であり、細菌による感染症ではないので、抗生物質は効かない（風邪とよく似た特殊な感染症の場合は効くことがある）。よって、普通の風邪に抗生物質を処方するのは無意味である。このことは臨床研究の結果（いわゆるエビデンスというやつね）によって、はっきりと実証されている。それでも日本の医療機関では風邪に抗生物質が漫然と処方されており、そのために莫大な医療費が無駄遣いされており、さらには抗生物質の効かない耐性菌の発生などの問題が起こっている。これは明らかに患者の責任ではなく、医者責任である。だから、これはここでの議論とは別の話だ。

このように、現代の医療は、「ひとつの病態」「ひとつの症状」に対して、できるだけそれに特異的な効果のある治療法（多くの場合薬物）を使用するのが原則だ。健康な人がたまたま普通の風邪をひいた時でさえそうなのだから、複数の慢性的な健康上の問題をもった高齢者が病院にかかっている時などは、この何倍もの複雑な状況になる。

病院に通院している高齢者には、10種類以上の薬を複数の診療科からもらっているような人は少なくない。これは「薬物の多剤併用問題」として、現代の医療の大きな問題になっている。もちろん色々な観点から、これに対する対策はなされつつあるが、根本には「ひとつの病態」に「ひとつの特異的治療」を対応させることを原則とする近代医療の限界と弊害が現れているといえる。

ちなみに、この「ひとつの標的に確実にひとつの弾丸を当てる」ような治療のモデルは、しばしば「魔法の弾丸」に喩えられる。ウェーバー作曲の「魔弾の射手」という有名なオペラはこのテーマを扱っているが、文字通りの「魔法の弾丸」を悪魔から手に入れるためには自分の命を引き替えにしなければならないのである。

さて、前置きが長くなったが、この「魔法の弾丸」と対極的な治療モデルが、「万能薬＝賢者の石」のモデルである。これは要するに、個々の病態や症状のひとつひとつに特異的に対応するのではなく、「何にでも効く＝非特異的に効く」ことを期待するモデルである。伝説やファンタジーや錬金術に詳しい人なら、おわかりのことと思うが、賢者の石＝エリクサーとは、どのような病いをも癒す、究極の万能薬であり、錬金術の秘法によって、鉛などの卑金属から創られる黄金と等価もものとされる。

え、それで何を言いたいのかというと…（そろそろ呆れられている汗）…。近代医学は、患者（＝苦しむ人）の問題は、何らかの特定の病態的メカニズムである「疾患」であると考えて来た。「疾患」は星の数ほどもある個別の原因によってもたらされる結果であるから、その個別の原因（あるいは

メカニズム) に対して、それぞれ対応する「疾患」を「治癒=cure」させなければ、近代科学のモデルは成就しないのだ。ところが、このような近代医学とは全く別の医学モデルもあり、実はこちらのほうが歴史はずっと古い。このモデルでは、医学の目的は直接的に「患者の苦しみを和らげる(「癒やす=heal」)ことであるとする。もちろんこれは可能なこともあれば可能でないこともあるが、その目的を達成するために、必ずしも星の数ほどもある多様な病態を経由する必要はない。その時に頼りになるのはむしろ「非特異的な効果」を確実に発揮する「何か」なのである。そして現代に生きる我々にとってその「何か」は、必ずしも「魔術的な」ものである必要はない。

確かに確実な再現性と客観性を求める狭隘な近代科学の観点からみれば、それはもっと主観的で、感情と共感に支えられた、あいまいで信用しがたいものであるかも知

れない。しかし、苦しむものと苦しむ者の役に立ちたいと願う二人の人間によって行われる相互交流(それを私は「医療」とか「対人援助」とか呼びたいのであるが)において、私達がもっとも頼りにし、最大限に活かすことが求められるものは、この「非特異的な効果」なのである。

それは非特異的なものであるから、明瞭に定義し、客観的に測定することは難しい。しかしその「効果」は確実に実感できるものであり、親密な関係性を基盤とする交流においては「言葉として表現し共有できる」ものである。そのような「賢者の石」によって象徴されるような「何か」のひとつの表現として、「非特異的な効果」「プラセボ」「萌え」といったものを並べることは意味があると思われる。もちろんそれらは、それぞれが、「全く同一のものではないが全く違うものでもない」のであるが…。

<続く>